

五島列島と平戸・佐世保・長崎地区

文——伊東孝 Takashi Hob ●日本大学理工学部社会交通工学科 特任教授 写真——西山芳一 Hoichi Nishiyama ●土木写真家

長崎は戦国時代の一時期、「東洋のローマ」「日本の小ローマ」といわれるまでに教会が建ち並び、キリスト教信仰の広がりがあった。しかし周知のようにわが国のキリスト教史は、布教の時代より迫害の時代の方が長い。天正十五年（一五八七）に豊臣秀吉は伴天連追放令を出しているし、徳川幕府は慶長十九年（一六二四）、宣教師を追放、残された信徒は迫害と弾圧の中で信仰を保持することになった。この人びとを「潜伏キリシタン」とよぶことを、今回の取材で知った。

取材前には、隠れキリシタンという呼称でしか知らなかったが、「潜伏キリシタン」以外にも、「離れキリシタン」「復活キリシタン」という言葉があり、「隠れキリシタン」の表記にも地域や文献によって「かくれキリシタン」「カクレキリシタン」「かくれ切支丹」など、いろいろあることを知った。一般的には江戸時代の禁教時代の



頭ヶ島教会内部

「花の御堂」と称されるように花柄を基調にした装飾で、楚々たる美しさを醸し出す。短い水平材を壁から突き出して、教会の内部空間を広く仕上げたハンマー・ビーム架構を採用。水平材は曲線の斜材で支えられ、全体としてはトラス構造といえる。

信徒を「潜伏キリシタン」、明治以後、信仰が認められるようになってから、キリスト教に戻った信徒を「復活キリシタン」、戻らず、江戸時代からの祖先の信仰を受け継いだ人びとを「カクレキリシタン」と使い分けている。これらの用語は、近代化の中で生みだされた言葉といえる。安政五年（一八五八）の日米修好通商条約を受けて開国したわが国の居留地には、在留外国人の礼拝施設として教会がつくられた。長崎のフランス居留地である大浦にも天主堂が建設された（一八六四年）。天主堂の竣工を知った浦上の潜伏キリシタンの訪問が、信徒発見の一大ニュースとして世界宗教史に語り継がれている。子から孫そして曾孫へと延々二世紀半もの間、潜伏して信仰を守った信徒が発見されたことは、西欧の社会では驚きと感嘆の出来事として紹介された。

神道の国教化を意図していた明治維新政府は

江戸幕府と同様、禁教令を敷き、浦上四番崩れと呼ばれる宗教弾圧をおこなったが、明治六年（一八七三）、禁制の高札撤去によって布教が黙認された。これは、明治維新政府独自の判断ではなく、いわゆる外圧によってなされた措置である。キリスト教が公認されるのは、明治三十二年になってからである。

さて暫定世界遺産リストに掲載された長崎の教会群は、五島列島と長崎本土の平戸・佐世保・長崎地区（本土地区）に多く分布している。間に五島灘が位置するこの地域は、すぐれた多島海景観を特色とする西海国立公園区域とも重なり、自然景観と文化景観にめぐまれた地域である。一口に長崎の教会群といっても、五島列島と本土地区とは、創建時期や由来、歴史は大きくちがう。五島列島の教会群は、潜伏キリシタン時代から継続するのに対し、長崎本土の教会群の多くは主に幕末および近代以降につくられている。

長崎へは学生時代や『CE建設業界』の取材以来、何回か訪れたことがあるので、市内の教会にはある程度のイメージはあったが、潜伏キリシタンに由来する五島列島の教会群についてのイメージはわかなかった。

都市計画の世界には、西欧の中世都市は教会を中心として発達してきたという模式図がある。教会の前に大きな広場があり、その広場を囲むように市庁舎や裁判所などの公共建築と商店が



頭ヶ島教会（新上五島町、大正八年）
木造、鉄筋コンクリート、煉瓦造教会建築が多い中で、珍しい石造教会。設計・施工は鉄川与助。長崎県を中心に多くの教会建築を手がけた五島出身の棟梁建築家。日本の教会建築に多大な貢献をした。



宝亀教会内部

高い天井のリブ・ヴォールト、葉や花模様、ステンドグラスの明るい彩りで、華やいだ開放感のある広がりを見せる。実際、側面の窓は扉をかね、外側のベランダにも出られる。天井を支える角柱には、丸太半割の付け柱がつく。



ほうき

宝亀教会（平戸市、明治32年）

会堂部が木造で、正面が煉瓦造の、失礼に聞こえるかも知れないが、看板建築のような教会。近代建築のひとつの表現形態といえる。アーチや控え壁などの白い部分は、石材ではなくペンキ塗装で、後の手によるもの。写真ではわかりにくいですが、会堂両側面にベランダを有するのが特徴である。



大野教会内部

簡素なつくりで、祭壇がなければ、教会とは気がつかない。格子窓とその上につくられた半円窓そして壁の白漆喰が、静謐で和洋折衷の内部空間を構成する。ド・ロ神父がこの地区の信者26戸のために建設した。

大野教会（西彼外海町、明治26年）

天川漆喰（赤土と砂と石灰からなる）で玄武岩を固めた通称「ド・ロ壁」に、トラス小屋組みをかけた石造教会。「ド・ロ壁」は、考案した神父の名に因む。長崎にしか見られない和洋折衷の教会建築といわれる。



建ち並び、周囲が城壁で囲まれて都市が形成された。教会より高い建物は禁止され、教会が政治と精神世界の中心であった。

既成市街地で西欧の中世都市のような形態を望むのは無理としても、五島列島という潜伏キリシタンが開墾した土地では、教会を中心としてどのような集落形態が形成されたのか、関心のあるところであった。

五島列島の教会群は上五島の訪問だけが、現地で意外に思ったのは、各教会が結構目立つ場所に建っていることだった。海岸の近くや、海から見える山の斜面や小高い丘の上に建っていた。潜伏キリシタンという言葉に引つ張られたのかも知れないが、わたしのイメージではもっと奥まった場所を想像していた。

二つの仮説を考えてみた。ひとつは、むかしはもっと奥まったところにあったが、明治になって禁止令が解かれてから、現在の場所に移動したという説であり、もうひとつは、最初から同じ場所という説である。

三十年来の友人で、「長崎の教会群を世界遺産にする会」事務局長の柿森和年さんに、疑問をぶつけた。建物は明治維新以後に建替えられているが、集落の場所は潜伏時代から変わっていないし、教会の位置も基本的にな変わっていないだろうとのことであった。ただし当時の教会の外観は、ふつうの民家とあまり変わらなかっただろうとの回答だった。集落形態については

不明。

江戸時代、五島列島は、島自体が大きな隠れ場所であった。五島列島という名の通り五つの大きな島を中心に約百四十の島よりなる。長崎から百_キ離れており、交通は船しかない。五島列島に辿り着いても、どの島に着いたのかは不明、また各島はリアス式海岸なので入江が複雑に入り組み、初めての者には入江や湾を特定することも困難であった。まさしく島全体が隠れ場所だった。五島藩では、潜伏キリシタンを開拓民として受入れ、比較的寛容な政策をとったことも五島列島にクリスチャンが多い理由になっている。教会の場所が変わらないというのもうなづける。

文化庁のホームページである文化遺産オンラインには、長崎の教会群とキリスト教関連遺産の普遍的価値として、わが国におけるキリスト教の歴史と、教会建築の西洋技術との融合そして文化的景観の三点を指摘している。しかし教会施設を中心とする都市や町の構成や形態についてはふれていない。今後の研究課題として残されているようだ。

参考文献

・解説・川上秀人『三沢博昭写真集 大いなる遺産 長崎の教会改訂版』智書房、二〇〇七年
・『旅する長崎学 キリシタン文化』長崎文献社、二〇〇六年
・http://bunka.ni.ac.jp/world/h_10.html
・<http://www.heritage-nagasaki.jp/jp/sotome/he41.html> など
*長崎の教会群の研究動向については、長崎国際大学の細田亜津子教授に助言を得ました。誌面を借りて謝意を表したい。